

# 第8回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第8回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで今年も日本全国および海外から六三一名という多くの方にご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に締め切らせていただきました応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、九月二三日、嶋岡晨、松尾真由美、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。今回もすぐれた作品が多かったことから、引き続き「佳作」としてより広く顕彰することにいたしました。

奨励賞および佳作の作品の中にも多くの方に読んでいただきたい作品がたくさんありますので、それらの作品も、できるだけ「文芸思潮」ウェブおよびインターネット誌上に掲載させていただく予定です。御期待ください。

現代詩賞の授賞式は、銀華文学賞、エッセイ賞、イラスト・漫画賞と併せて、明年二〇一三年一月二十六日（土曜日）午後二時より東京都大田区下丸子の大田区民プラザで行なう予定です。受賞者以外の方も御参加できますので、親睦を兼ねて、お誘いの上ぜひ御来場ください。

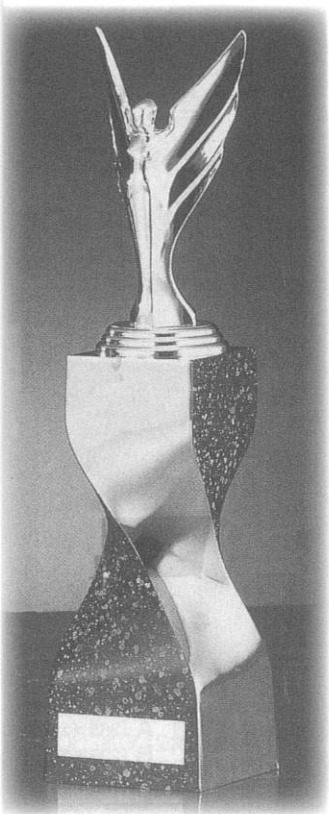
第9回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行います。締め切りは五月三十一日です。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

## 第8回「文芸思潮」現代詩賞

### 最優秀賞

該当作 なし



### 優秀賞

「岬の突端にいる人よ」「幻の蝶」  
「地の果てはかげろうの彼方」  
川原 歩（神奈川県海老名市）

「存在肯定証明」「∞形状進化」

「消失光点域」 榊 一威（山形県寒河江市）

「裸木」 清水一美（東京都立川市）

「庭は墓なのかもしれぬ」

熊野緞子（東京都杉並区）

「不帰郷」 山下洪文（東京都豊島区）

### 奨励賞

「巫」「種子」「引き継ぐ月日」

芳賀沼さき（神奈川県横須賀市）

「メタ世界より」「書熱の中で」「有限のメモ」

漆原正雄（鳥取県鳥取市）

「中毒」「残照」「ジオラマ模型」

冰瀬 憂（北海道函館市）

「失意アンテナ」「夏の日の失速」「失光から、過ぎ」

中河 萌（京都府京都市）

「行間に、焼け焦げた肉片は臭うのか？」

小池陽慈（東京都大田区）

「新しい国」

貝崎由香（大阪府茨木市）

「明鏡止水ときどき揺らぎ」「踊る雪月花」

浅見龍之介（埼玉県草加市）

「効かない薬」「BOKUKUN」「半獣神」

丸岡永乃（神奈川県川崎市）

「夢のあとさき」「菜の花の季節」「海の中の空」

遠藤芳子（東京都狛江市）

「時の散在、あるいは眩暈」「犠牲の涙」

町田理樹（大阪府大阪市）

「日付変更線」「年齢詐称」「行列」

江田つばき（千葉県市原市）

「葱池」「ぼんやりとした女」「立像」

草野理恵子（神奈川県横浜市）

「銅版画」「テンペラ画」

吉川彩子（和歌山県和歌山市）

「箱舟」  
「Ship of Fools」「不可解な犬の散歩」「失憐冬日」

中島真悠子（静岡県富士宮市）

「椋鳥」「声」「さなぎ」

滝川 閑（神奈川県茅ヶ崎市）

「いいにおいにする方へ」「少年少女の息で砕け散りそうなの」

岡崎 師（北海道札幌市）

選評



まつお まゆみ

1961年北海道生まれ  
個人詩誌「ぶあぞん」発行「歷程」同人  
詩集『燭花』（思潮社）  
詩集『密約—オブリガート』（思潮社）で  
第52回H氏賞受賞  
詩集は他に『揺籃期—メッサ・ヴォーチェ』  
『彩管譜—コンチェルティノ』『睡濫』  
『不完全協和音 consonanza inperfetto』  
『雪のきらめき、火花の湿度、消えゆく蕊  
のはらかな記憶を』（すべて思潮社刊）  
BOX詩集個展用パンフレット詩集  
『裝飾期、箱の中のひろやかな物語を』  
現代詩文庫『松尾真由美詩集』（思潮社）  
アンソロジー『現代詩最前線』（北溟社）  
『小野十三郎を読む』（思潮社）『短篇集  
夜』（驢馬出版）  
北海道新聞文学賞（詩部門）選考委員

詩に向かうこととの繊細さを

松尾真由美

今回は残念ながら当選作がなかった。全体の印象からいっても読み手の胸に迫ってくる作品が少ないように感じられた。なぜ、詩を求めめるのか、詩で表現することの意味をもう少し考えてほしいと思う。そして、気になったのは記号の扱い方である。( ) や / や ! を無造作に使用する作品が多すぎる。本来的には、詩は言語の格闘である。何気ない一語でも作者次第で言葉の陰影は変わり、同じ言葉を使っても作者によって重さや軽みが出る。それだけ詩の言葉は個的で豊かなものである。こうした詩の言葉の中に記号（異物）を入れ込むことは簡単ではなく、よほど効果的に扱えなければ、作品を潰すことになる。  
このことは充分に承知すべきことであって、その上で各々が作品に向かつてほしい。

優秀賞の山下洪文は作品ごとの冒頭に黒田喜夫の一節を掲げている。黒田は、その濃い作品世界に魅せられているファンが実は多く、この名を作品に使うことは非常に危険である。黒田の詩と比べられるからだ。しかし、山下は黒田のエッセンスだけを抽出して自己の詩世界を広げたことで、詩人の一節を生かせたと思う。「不帰郷」は、僕と君が故郷という言葉で対比され、逃げ場を持つ者と持たない者の違いを鮮やかに描き出す。この対比が陰と陽、深さと浅さ、最後に善意（はつきりとは出ていないが）と悪意（僕）で締め括られるのは胸を突く。深い孤独があるからこそ深い優しさがあるということが、若い僕と君の関係から浮き上がってきたのが秀逸であった。  
同じく優秀賞の榊一威は「∞形状進化」に詩としてのまとまりを感じたが、あえて「存在肯定証明」について語らせてもらう。榊の作品は言葉のリズム感が良く、書記と身体が一体化しているがゆえに説得力があり、表現の過剰さも許容範囲に納まる。だが、「世界を想像、創造」は詩の中で簡単に使うべきではなく「次元、時限」とは言葉の質が違う。こうしたところに注意深くあつてほしい。  
優秀賞の熊野緞子「庭は墓なのかもしれない」は、一行ごとの微妙な飛躍にぶれがなく端正な印象を受けた。血というものに焦点を合わせたゆえであろう。身内（父や妹）が言葉どおりに主体の身の内に入っていて、人の存在の内と外の混濁に独自性を感じさせる。それは主体の対象（父や妹）に対する拒否と肯定の心情の幅に依りて、端正な行運びの中にこの激しい振幅がこめられ、この作品の強度を象っている。  
優秀賞の清水一美の「裸木」は天や地という大きな対象を歩行の感覚で受け止める。偉大なものとの邂逅に漢語が効果的に使われて、ひとつ間違えばステレオタイプに墮してしまいうテーマを集中力で乗り越えている。そこに力を感じた。ただ四か所の（ ） はすべて削るべき。説明的になつてゐる。  
奨励賞の丸岡水乃の「効かない葉」は素直な書き方に好感が持てた。風景の描写が良く、そうしたリアルさと、夢遊病患者という固い代名詞が、言葉の動きがリズムカルだからこそ表現に浸透できている。鎮痛剤も詩の祝祭の中の一つの薬味であるだろう。活動的な明るさが心地いい。最後の一行も良かった。

佳作

- 「黒いこだま」 「諦観」 「思春期」 小松真紀理
- 「箆を編む」 「鴨上戸」 佐藤光江
- 「デイトール」 「孤独死」 「青い鳥症候群」 柏邊愛菜子
- 「蕾」 佐藤隆定
- 「千光寺」 「髪の生涯」 「柳の下へ万葉集より」 柁井康子
- 「ソリタリー・プラットフォーム」 「ダイヤモンドの断崖で」 御園陽樹
- 「瀝青の塔」 小山 健
- 「狂乱、妄想」 「棺」 「小屋」 東 正直
- 「中立的な午後」 「扇風機と初恋」 「健康な生活と缶ビールのための7話」 篠田耐江
- 「臨界」 「褒美」 「まっすぐに命まがりくねって」 きくみるかを
- 「光の窓」 「肉の塊」 「置いてけぼり」 一塚 保
- 「よろしく 博多の空よ」 「最勝のペンとなるならば」 上田 勝
- 「悔恨」 「二十世紀には 砂嵐」 菊池智弘
- 「ルナティック」 「蛆虫の約束」 水魚
- 「標本」 「収穫の日」 「あなたの椅子」 松岡 宮
- 「踏切」 「急行急病人線」 「往復」 岩田和佳奈
- 「夜」 「火花」 「エレジー」 関
- 「どろ」 青木由弥子
- 「詩による試論…たとえば『人魚姫』について」 「線」
- 「生命の木」

- 「レンタルエンジェル」 「歩き方」 「証明」 広瀬治弥
- 「夢殃殺梅花詠詠歌」 「嗟病遠等咩禍津日賦」 「絳御衣姁神白骨嚙祭文」 佐藤駿司
- 「閉塞+」 「雨にまつ、霜月の」 「窓枠」 渡辺利彦
- 「言語へ孤立した神聖空間>始原」 「アリサへ」 「ピクチャー」 嶺井貴雪
- 「暑い」 「股かけ」 「マリー」 村上 柀
- 「香ル池」 「さいしよの空」 「色」 日疋士郎
- 「愛されて育った子」 「絆の裏側」 「欠けている」 大空美南
- 「点綴」 「義眼」 「彼女」 國分郁子

奨励賞の江田つばきの「日付変更線」は望遠鏡や遊覧船という指示性のある名詞や、具体的な動作が「こえるために線はある」という抽象性に現実感を持たせている。一場面の甲と乙が見えるようで、作品に説得力もあふれるのだが、しかし、最終連、終わるためにこの作品の説明などの落ちはつけなくていい。想像力で最後まで描ききること。  
奨励賞の小池陽慈の「行間に、焼け焦げた肉片は臭うのか?」。伸び伸びとした筆致で描かれる作品は、実際には悲惨な世界のどうにもならなさや訴えているのだが、娘という真つ当な未来の明度が読者を救ってくれる。娘という言葉が軽々しくないのは、次世代の娘への作者の思いが深いからだろう。だが、一連目は表現として弱い。ない方がより作品がクリアになると思う。  
浅見龍之介の「踊る雪月花」は諧謔が楽しく跋扈している。カップ麺と

グリコーゲン、限らないわと悩ましいわ、とかなり韻を踏んだりリズムは会話体によって自由自在な感じを受ける。無駄な言葉もなく「独楽のごとくに舞い澄ます」のは主体でもあって、メタ詩的な部分もあり作品の完成度は高い。

同じく奨励賞の町田理樹の「時の散在、あるいは眩暈」は、へやの中空に腰を下ろすというありえない情景から語りが始まるのだが、無際限的に不毛で宙に浮いた主体が、遊び心で周りを見つめる目があるからこそ、虚無を感じさせない。そこに生の肯定があり、自己の位置づけや自分の存在をひたすら問うているところに詩を強く感じさせる。

奨励賞の中島真悠子の「箱舟」は、傍にいる子どもたちからトリポリ、カブル、ニューヨークと主体の想念は飛び、子どもたち（現実）が詩の世界に入り込むのだが、それは夢想というよりも地上存在の疑問へと収斂する。始めから丁寧な描かれていくことで、四連目の飛翔感は深みがあった良質だが、次の終連（着地）がうまくいっていない。惜しいと思う。もう少し神経を使ってみよう。

奨励賞の岡崎師の「少年少女の息で砕け散りそうな」は、綺麗事ではない綺麗さに満ちていて好感を持った。月や白など視覚的な情景が前面に出ているが、さり気なく音的なものも絡ませ、作品に膨らみがある。君という存在への要請が純粹であるゆえに君は神秘性が帯び、美しい場所へ読者を連れ出してくれる。

奨励賞の吉川彩子の「テンペラ画」は、時間と空間が一篇の作品の中で広やかに展開される。言葉にも勢いがあり、テンペラ画という歴史性がテーマに被ったことで自由を得ているようだ。終連の意外性も良い。

同じく滝川閑の「不可解な犬の散歩」は、場面展開の妙味と犬との一体感が、不可解なままに提示されるところに感心した。漆原正雄の「メタ世界より」は、主体の無邪気さが粗雑さとは反対の能動性を湛え、もつと詩を沢山書き込めば洗練されてくるだろう。ただし！の強調はダメ押しでもあり、読者の感興が醒める場合が多々ある。遠藤芳子の「海の中の空」に私は詩としての昇華を感じた。単純に死を悼む言葉よりも、遊戯的に鬼をだす勇気が作品をプラスに向けている。草野理恵子の「ほんやりした女」は物語性の面白さで読者を楽しませてくれた。

一と氣迫に溢れた最高の作品はなかなか出てこないものだという認識を嘆息まじりに持たざるを得なかった。あるいはこれは「文芸思潮」現代詩賞の現象だけではなく、日本の詩界全体に起きている現象かもしれない。根をもつと探ってみる必要があるのかもしれない。

今回それでも最優秀賞の可能性を感じたのは、漆原正雄氏の「メタ世界より」「書熟の中で」だった。この明晰な言葉の展開力、明快な造形力は、外へ向かって弾けているので、インパクトがある。この外向性は現代を斬るには有効で、真の対象を得たときには、もつと破砕力を増すかもしれない。ただこの明快さと切れのよさが、わかりやすさを踏み越えて稚拙な表現に走っている箇所が見られ、それが読む人によっては詩全体の印象を損ねているように取られる懸念はある。他の選考委員からの「疑問符や感嘆符の過多用はいただけない。詩を安っぽくする」という指摘も否定できない。私自身は期待と可能性に賭けてもいいと思っただけで、辛抱して新たな作品を待つのも才能に対する選択肢ではあるだろう。力と情熱があればまた別な作品を引っつけて必ず上ってくるはずである。そのときを期待している。

最優秀賞がない代わりに優秀賞は増えて五人になった。川原歩氏の「岬の突端にいる人よ」「幻の蝶」は、魂の彼岸への跳躍性がある。ぎりぎりに追い詰められた状況を直視して、むしろ彼方への信仰を立てる精神の賭けは、その純粹さゆえに遍照の輝きを放つ。彼岸からの光に現象の悲しさを照射する悲痛な調子がある。現実を断つ——その覚悟が発光する。そしてなおこの現実を肯定する深い悲しさが、琴線を震わせる。この詩象世界をさらに進み、現実と彼岸の構造を突き詰めていくことは苦しい道程だろう。しかしここに氏の詩人としての歩みがあるはずである。表現の甘い所を克服し、さらに進んでいかれることを祈念したい。

清水一美氏の「裸木」は力作で、ここには自然のなかで屹立するものの裸形の実相が、生きる修羅に堪える共感のうちに響き合っている。言葉に作り物ではない力がある。自然の峻厳さに洗われた者だけが持つ透明な純質は、ある硬度を得ている。ただこの硬度が、高山に留まって降りて来ない頑さに繋がっているのは、詩を閉鎖気味にしている。自然のなかで得た壮大な生命のドラマを、万人の共通のテーマとしてわかりやすく身近に展



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ  
79 「流謫の鳥」で群像小説賞受賞  
98 「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンター主催第1回新人賞最優秀賞受賞  
2002 「鉄の光」で健友館文学賞受賞  
他に「ノンちゃん、NONGCHAN」「ワットブノムへ」「破壊者たち」など  
評伝「詩誌『帰郷者』の栄光と悲劇」

## 言葉の源の力を確認

### 五十嵐 勉

第八回「文芸思潮」現代詩賞には六三一名の詩が寄せられた。日本および海外からこれだけ多くの人々が詩という言葉の凝集力を持った表現形式に、ある内部を託しているということは、驚きであるとともに、頼もしさを感じる。中学生から九十歳の方まで、言葉に託す思いや情動が確固としてあるということは、言葉に宿りうる何か、信頼しようとする何かがあるということだろう。それは無条件にうれしいことだ。さまざまな思いが、この現代日本には渦巻いている。それが内部の苦しみや叫びや叫びのどろどろした力から、状況を脱して別な精神の形を希求し、高みをめざし、昇華を辿ろうとする動きを示している。言葉の源の力は存続しているという確信を得られたことは何よりも喜ばしいことだ。

全体に詩のレベルは上がっており、特に三次予選通過作品は増えて、それを落とすか苦慮したほどだった。佳作、奨励賞レベルもその作品数は多くなっている、数だけを見ればその豊かさは増大している。全体の賑わいは大きくなっている。今回奨励賞と佳作が増えたのはその姿を反映するものだ。

ただ、そのトップレベル——最優秀賞として称揚すべき作品は、残念ながら今回は見つけられなかった。トップがトーンダウンしているというこの傾向は三年くらい前から続いており、どの選考委員も文句なく推すパワよって身につけてほしい。

毎年のように優秀賞レベルに上ってくる榊一威氏は、実力だけでなく、その意欲も努力も注視すべきものがある。前年と同じでは、連続受賞は難しい。より向上や意欲が見られなければ評価が落ちる。その厳しさをかいくぐっての優秀賞は、価値がある。今回特に評価の高かった「∞形状進化」は言葉の遊戯的な連鎖のなかに、存在の疑問をちりばめて、それなりの問いになっている。ただ言葉の意外性を追う遊びのなかに詩性が紡がれるという基本的なスタンスは、遊戯である以上空虚さを脱しきれない。根本的な自身の詩の方向を改めるときがやってくるかもしれない。選考委員としてはむしろそれを期待している。

山下洪文氏の「不帰郷」は、本来もう一篇の「帰郷」と対になって評価されるべきものかもしれないが、「帰郷」のほうは安易な表現が目立ち、とても対をなし得ないものだった。私は「不帰郷」のほうだけを評価した。特に最後の「君の生首もいつかはらはらと舞い落ちればいい」という結句は鮮やかである。あえて苦言を呈したいのは、詩の冒頭に黒田喜夫の詩の「おまえはもう獣にかえれない」という一句を引用している点である。私はこういう引用に対する評価が極めて低い。詩人なら自分の言葉でこれくらいの表現は作り出せと言いたいし、何よりも他人の言葉によりかろうとする姿勢が詩人失格と断じたい。こういう引用をするなら、この作者は黒田喜夫以上には絶対になれないだろう。これだけで「私は黒田喜夫以下の詩人です」と宣言しているようなものだ。

熊野絨子氏の「庭は墓なのかもしれない」は、言葉の流れのよさ、紡ぎの緊密感に注目すべきものがあり、その底に横たわる殺意の緊迫感は、におい立っている。しかし発想そのものがありきたりで、私は詩としては物足りなかった。寺のない村での農家や漁家で昔は庭に家族の墓を造っていたことはありふれた風景だった。墓地を離れて造って日常から遠ざける習慣は比較的歴史の浅いものである。それをことさら新しい感受性のように言われるのは、興醒めでしかない。むしろこの作者の素質は、小説のような、状況を綿密に構築する叙述に力を発揮すると見るべきだろう。発想は

貧弱だが、状況の緊迫感に満ちた表現に伸びていきそうな気配がある。これも他の選考委員と大きく分かれた評価だった。

奨励賞には伸びていきそうな若い才能がひしめいていた。芳賀沼さき氏の「巫」「種子」「引き継ぐ月日」は、回文による詩である。回文は逆さまから読んでも音が同じになる文や詩句で、かなり長いこれらの詩を回文によって構成し、しかも意味もそのなかにしっかりと込められていて、一つの奥行きをもった詩造形にしている手腕は並大抵の才能ではない。私はこれを高く評価している。優秀賞以上でもおかしくなかった。普通の表現は内容が先行し、それに合わせて形式が決められるが、回文のように、形式のうちで造形される内容があつていいのであつて、短歌や俳句などもその例であろう。日本ではその価値が認識されていない分、一般には受け入れられにくい損な点があるかもしれないが、回文の形によって見えてくる世界も確かにあるのであつて、この新しい表現形式を曲芸に過ぎないとして頭から否定してしまうのは、創造的ではないだろう。この造形を続けていくことには、必ず何かの成果があるはずで、作者にはこの才能を大事にして持続してほしい。

氷瀬憂氏の「中毒」「残照」「ジオラマ模型」は、昨年高校生時の詩よりも飛躍的に進化している。言葉の翼は自由に広がって、躍動が見られる。一八歳でこれだけ言葉を駆使して展開していきける力は一つの才能であつて、今後どのように成長していくのか楽しみでもある。ただ、現代詩の技巧を観念的に追いついて、韜晦や高踏の罫に陥っていくことだけが危惧されるが、直球としての言葉の力にも磨きをかけることで避けられるものと信じる。

小池陽慈氏の「行間に、焼け焦げた肉片は臭うのか？」は昨年同様大胆な設定だが、前回の作品は立ち会い出産という強烈な現実があつたの比べ、今回の作品は幼児の娘と歴史を素材にしている分、やや小粒になった感じがいなめない。事件に立脚した詩は、同じくらいインパクトのある事件をまた欲するという循環を背負つてしまつていようにも見えるが、これをもっと別な要素で乗り越えることも必要だろうし、可能だろう。もっと鋭利な視点の転換もありそうである。

中河萌氏も二十歳の若い詩人で「失意アンテナ」や「夏の日の失速」は



しまおか しん

1932年高知県生まれ  
詩人 フランス文学者  
53 大野純らと「獲」を  
創刊 形而上学的な叙情詩  
をめぐす  
65「永久運動」で岡本弥  
太賞  
99「乾杯」で小熊秀雄賞  
元立正大教授  
著作に「嶋岡農詩集」「現  
代詩の魅力」小説「裏返し  
の夜空」評論「詩とエロス  
の冒険」翻訳に「エリュア  
ール選集」などがある

## ありふれた発想のよさ

### 嶋岡 農

優秀賞の詩についてのみ、簡単に感想を述べておく。

熊野綾子「庭は墓なのかもしれない」  
血族の眺め暮らす庭、それは互いに相手の死をそこに重ねずにはいられないことで分かち難く結ばれる場所ではないか。ありふれた発想のようで残酷な悪意をひそめるイメージ。怖いものを持つ複雑な(血)のはたらき。この自然なようで異常な視線の魅力。

山下洪文「不帰郷」

戦後の代表的詩人のひとり黒田喜夫の詩想を下敷きに、帰郷ならぬ人間存在の原点への回帰をねがうその情念のあり方が、美しい。家畜ではない(獣)への志向の拒み難い主張に打たれる。

柳一威「存在肯定証明」

主題の核心をじゅうぶん捉えていないもどかしさがあり、もったいぶった論理のひけらかしもあるが、この露出病めく自問の積み重ねには確かに(肯定)へのけなげな欲求が認められる。

川原歩「岬の突端にいる人よ」

生きる不安の微妙な境界、死の岬の突端にある感覚。やや古めかしい夢想の展開だが、表現の確かさに救われている。末尾は少々教訓的。

発意の切れ味がある。「——失意アンテナのたつ家の多さときたら」とか「ゴミ袋があくびをした／幸せのすえたにおいがする」とか「放つておいたから／食われちまったんだ」という表現は鮮やかな刃の一閃がある。詩でなければできない鮮烈な言葉の一閃は解放感がある。これを大事にしてほしい。短くていいので、研ぎすまされた断裁力をさらに鋭利にしたいと、驚くような輝きに到達するかもしれない。

「Ships of fools」「不可解な犬の散歩」「失憐冬日」の滝川閑氏は三つの詩がまったく異なったトーンで書かれていて、それが不思議な立体感を立ち上げてくることに気づかされた。これだけ異なったパターンで詩を作れる人も珍しい。よく見るとここには潤い豊かなみずみずしい情感があり、そのきれいな流れの行方を掴みかねている不安との表裏がある。どちらかと言えはみずみずしい情感の方に本来の力と姿がありそうだが、双面を取って現れてくるのも詩作の不思議さだろう。

佳作にも印象に残った作品が少なかった。「夜」「花火」(岩田和佳奈)の強烈な言葉、「悔恨」(上田勝)の力に満ちたカタカナの浮き彫り、「アリスへ」(嶺井貴雪)のルビを多用した複合表現、「股かけ」(村上柊)の思い切った貫き、「よろしく 博多の空よ」(篠田耐江)の地味だが現実を直に宿した重さ、「どこ」(閔)の絢爛たる侮蔑の模様構成、「千光寺」「髪を生涯」(柘井康子)の現代から仏性への橋渡りなど、力の認められる作品があつた。昨年も見られた佐藤駿司氏の古典的表現にルビを重ねる手法は、現代にそれを使う必然性をどう打ち出していくかという問いに答えていない。このままではただのペダンチックな表現に留まつてしまう危険があることをよく問い直してほしい。

現代の日本の詩の世界は、全体に何か一つの壁に突き当たつていて、澁刺とした感情の発露に欠けている気がする。大家と呼ばれる詩人の詩にも「これが」というつまらないものも多い。詩はもともと自由の翼を伸ばしていい。この混沌とした停滞世界で何をしようが表現は自由だ。現代の詩壇そのものをぶち壊すくらいの気概をもって思い切つた詩をぶつけてほしい。汚辱の現実を切り裂き、コンクリートや鉄や組織の理不尽な圧力を断固破碎し、天上に届く清冽な声を、来年もさらに待ちたい。

清水一美「裸木」

観念的な固いことばが嫌味だが、体当り的な孤独感の表出にふしぎな魅力がある。

わたしの強く支持したのは、熊野、山下両氏の作品だった。やはり、他よりぬきんでることは困難で、そこにこそ妙味はある。



選考会風景

岬の突端にいる人よ  
あなたは背中をひと押しされれば  
その深淵を飛び越えてしまいうだろう  
何を求め そう高く飛ぶ  
あの雲井の彼方は人の住む世界ではない  
いつ果てるともない虚空は自由ではない  
天のきわみに あなたは  
一人ぼっちになると言うのに

岬の突端にいる人よ  
あなたは逆巻く波に魅入られて  
その深い蒼に救いを求めているのだろう  
この心を抱けと 海に叫ぶか  
大いなる広がり母のたもとではない  
泡の子守唄が見せる夢は覚めることがない  
はかなくとも明日の夢は  
覚めるからこそ見られるというのに

# 岬の突端にいる人よ

## 川原 歩

岬の突端にいる人よ  
あなたはその翼の大ききゆえに  
身にあたる風の強さに泣くだろう  
羽をちぎって 落ちてゆくな  
重力に逆らわなければ天はない  
願いに捧げられるのは命ではない  
あなたにからみつく鍾は  
あなたを求める手だというのに

岬の突端にいる人よ  
振り返れ  
そしていま一度  
この目を見よ

川原 歩

かわはら あゆむ

福島県会津若松市生まれ  
早稲田大学第一文学部卒業、早稲田大学  
文学研究科修士課程修了  
第6回、第7回文芸思潮現代詩賞  
奨励賞受賞



# 幻の蝶

戦場を飛んでいた 白い蝶々  
弾丸が打ち抜いた  
あれは あの人の魂をのせた 蝶だったのに  
血の空 涙の川  
それでも越えて 来たのに

蝶は 光のしづく落としながら  
七色のしるべをつけてきた  
誰もが惹かれ 追いながら  
蝶の目指すところを知ることにはなく  
その羽が高みに昇れば  
憎み 石を投げた

蝶のいない戦場に 鉛色の空が落ちてくる  
蝶を打ち抜いた我々は 目指すものを失った  
もう空は明けることがない  
閉じられた空に弾丸の雨が降り  
蜂の巣となって あとかたもなく  
崩れ落ちるだろう

それでも 地を這いうずくまる我々は  
瓦礫の山に蝶を探す

それなしには  
生きてゆくことはできないと  
祈りつつ 蝶を探す

蝶を呼び戻すには  
蝶の飛ぶ空がなければならぬ  
蝶の飛ぶ空には  
その向こう側がなければならぬ  
そして 他ならぬ  
蝶に命を与えるものがなくてはならない

誰か 誰かいないか  
魂となっても 飛ぶもの  
飛ぶ先の世界を知っているもの  
我々にとって この上なく  
憎く いとしいもの

幻の蝶は 夜ごと夢に現れる  
そのどれもが 朝まで生きることにはない  
目覚めて廃墟で泣く  
涙の川は決して枯れることがない

戦場を飛んでいた 白い蝶々  
弾丸で打ち抜いた  
あれは あなたを目がけ 飛んできた  
管々と 泣くだけの  
あなたを指して 来たのに

### ●受賞の言葉

詩とはいったい、何なのか。  
そんなことすらよくわからないまま  
に、このたびこのような賞をいただき  
ましたこと、嬉しさと同時に不思議な  
感じもいたします。

きわめて個人的な感情の発露から生  
み出され、しかもいっさいの表現上の  
制約をもたない「詩」というものを、  
本当に誰かが「わかる」ことや、それ  
によって何かを共有することは、はた  
して可能であるのでしょうか。

詩の表現は抽象的であらざるを得な  
い以上、〈私〉を断念して投げ出され  
た言葉が、他者にむかって開かれた沈  
黙を守るところに、一定の普遍性の入  
り込む余地があるのかもしれない。  
〈私〉であって〈私〉を超えるもの、  
というこの対極の位相の懸け橋となっ  
て束の間、現われるものが詩なのだ。  
半ば祈りを込めて信じたかと思えます。  
形なき思いこそこの身を越えて、と  
彼方へ手を伸ばし続けて、時折指先を  
かすめていくものの影を、これからも  
少しだけつかまえられるらと思えます。

収束していく、おぼつかない時間の中で、息をしている。ゆっくりと動く胸は、わたしの限りなく感情に近い場所を刺激し、痛み始める、ココロの奥、は。閉鎖された鉄格子の部屋の、独り蹲る背中影に恐ろしく似ていて、わたしは。〈代数のように、入れ替われば、いいのね〉でも、そうしたら、わたしは形を失ってしまい、ます、

咲きほこる対の月が、弧を描く、のを、眠れない空間内で観測していた、  
(針は少しも、ふれない)

抽象的な姿を、わたしは受け入れました、世界はそれを容認し、わたしは、止まることのない歴史に組み込まれた、

暗号(ばすこーど)であれ——と、

わたしは、冷えた掌で掬ってゆく、その分子さえモデルチェンジするような、そんな結果でした、単なる集合体ではない、それは、変化を伴い、概念を覆すような、反逆者の叫びでした、わたしの全身が、Z〇をだして反発し、自転の速さをも狂わせてしまうくらいの形態を持ちながら、再構成されるはずの、個体であった、のです、

静かにたたえるアイの中に、声がして振り向くけれど、其処には誰もいない、

計算では、合っていました、理論的にも、問題ありませんでした、けれど、

わたしは、枠の外に吹き飛ばされた、観念体になりました、

定数が0、デフォルトがカオス、わたしは、殆ど理解されませんでした、かわりに、鉄格子の中に、いれられました、

散乱した記号を組み合わせると、

∞の、わたしが、でき上がります、

単なる経験則でも、値でもなく、

対価の代償、として、わたしはつくなう、

針が、少しふれて、

月が深いところへ、沈んでゆく、

∞、それは、わたしの名前、

世界で、唯一の、

名前、

何処にでもあるし、何処にでもあります、めくる頁の中にも、

すべてが確率だった日、わたしは世界を巡っていた、

恐ろしい速度で、シナプスをつなげてゆく、

世界が呑み込まれる前に、降りそそいだ生命の雨、の中にも、わたしは取り込まれて、

流動しながら、形体をなくし、鉄格子の裡まで突き抜ける月の光のように、

世界は。この区切られた世界に、そっと鍵をかけて、次に現れていくステージを乗り合わせていく、観測形状さえ未定のまま告げられる残り時間に、消失したものの串い、を、し

よう、裂かれた空と、わたしを確立しながら、回顧／解雇されてゆく可能性を看取る、その姿を網膜にしっかりと焼き付けて心象査証しながら、僅かずつ進んでいく、プログレス、

冷えた空気を吸い込みながら、

もう進化しか、しない、と、誓う、

誓いながら、過去と未来の重さに気づき、使用停止された観念体のまま、

申うのだね、

アイが、

∞に、

拡散していく、わたしの、

浸透していく、わたしの、

暗号(ばすこーど)である、わたしの、

歴史に消尽していく、思考停止された数々の問いよ、

常に、存在し、狂いを示し、

時間の鼓動を、聞け、

アイ、よ、

∞、それは、わたしの名前、

わたしと世界の、最期の、

名前、

# 無限大 形状進化

# 榊一威

榊一威 さかき かずい  
東北芸術工科大学卒  
2012年 3rd 詩集  
「未来進行形進化」郁朋社より刊行中。  
アリエナシオン  
<http://ameblo.jp/mukuro4219/>

### ●受賞の言葉

作品が、「難しく、」なんてよく云われるけれど、トにはわからない。けれど、わけの解らないものを書いてるつもりではなくて、でも確かに、トのことを、そんな簡単にわからせてしまったら大変なので、そのままにしているところ。

最終的な目標をみつめて、ダイレクトに人生を使い人体実験しながら、トは生きてると云っている。

そして自分や世界を観測し、観測されながら暫定決定され、故にトは存在できていると、まじめに思っている訳ですが。また、そうした気持ちで日々、書いている訳ですが。

今回の作品も、トの原風景を観測した結果的派生なのだとおもう。トと世界とを繋ぐ接点、文章と云う形になって、決定され表れてくるのだ。

トはまだ、進化の途中だけれど、その苦しみの中、賞と云う形になって認めていただけなのは、大きな支えであり、よるこびであり、嬉しいことには変わりはありません。

この作品を選出してくれた選者の方に、心から感謝する次第です。ありがとうございます。

# 裸木

天蓋のいずれの階層の希求が  
裸身を晒すその直立を支え  
耐えうるいかなる直視が  
その芯に命脈するのか

沈黙を歪めるわずかな空隙も許さず  
信を受け日月星辰を数えるもの  
夜を訪ね読みえた星の運行  
返しの利かぬ定跡の指し

去年ことばの落下を受容した大地の黙示  
先触れる季節の召命に屍衣を脱ぎ捨て  
無窮へ向けられた眼差しに漲る  
目覚めたものの世界のすがた  
路傍の石も契約の地を天に  
巡る星座の軌跡に刻む  
基軸を北極星に結い

周回に閉ざされる全き円環  
死に支えられる命は試行し  
巡るほどに稠密な層を重ね  
千歳に負う日の萌芽を待ち  
天に広げた腕に誓を象り  
萌え出る祈に空を指す

逝く星の座標をしるす過去系  
無を刻印され悲鳴を上げる碑銘  
十万燭光の光子の洗礼を受け  
父祖より継承される名の祝福を受け  
気圏より雪崩を打つ風の装束に  
三千世界に木霊する私の死  
(賑わいのすがた)

風光の煽りにひらめき若やぐ緑態の歓喜は  
今朝を名残の未明の幻などではない  
おお 彼らは去った  
彼のものらは逝ったのだ

一羽の鳥がわたくしを啓示する  
死者を呼び覚ます暁暗の宿り  
曙光の淡い命の来迎は橙の  
仄かな色の揺れる間にも  
枝に膨らむ堅い芽には  
少女に萌すわたくしとは異質の  
あえかな胸にさやぐ委託

眩暈にも似た上昇流を  
下降していく陽の移ろう白系の輝度に  
突き上げる大地の希求に応え  
鳴動する水管は今また新たな  
わたくしを葬る地殻に根を  
さらなる深みへと試みる  
聞け 聞け  
地殻を衝き動かす不眠の対流を

優秀賞

鋒上がり

——孤独 否

(孤独は見るものの耐えるすがたであれば)  
そこに立ち現れるすがたは  
未明を開くひと粒の死に  
充溢していくわたくし  
求め合うほど深みを増す一  
垂直に貫く渴きに磔けられる  
——邂逅 是

待ち来るもののある  
変容を重ねる循環に不変の  
遍く呼ぶ声を聴くもの  
かのものが印した点描は  
荒地さえ叫ばずにはおれぬ  
渴きの末に餓え 埋められぬ  
階調に灯し続けた夜の底に訪れる  
着慣れぬ希望を脱ぎ捨てる黎明  
幽明の地平線に見開く明けの  
明星の下旧約を顕す預言に  
かげろう一顧の期待  
——私を解く兆し  
主を失った墓標に倒立する悟改は  
生まれぬ夜に鬼胎を孕ませ

目覚めてある極北の星にも胎動する  
四百光年の環流を その共鳴は  
始原より発せられる 問いかけ  
振り向いてはならぬ  
時制に圍繞された墓碑銘は  
死の証人たり得なければ  
そこにその者はおらぬ  
おお かの者はそこにはおらねば

白金の新たし朝が降りきたるつれ  
伸び上がるわたくしの素心と  
翔け昇る大地の祖霊ゆ  
千載の邂逅を遂げる天心の碧  
(父の還った蒼は何れの階調か)  
目覚めよ 目覚めよ  
(わたくしはこころの泥塑ではない)

いのちは一顧の試みであれば  
わたくしとは造物主の  
始原からの問いかけ  
ことば そのすがた  
天を突くひと振りの白刃  
鋒に解かれる今朝の死  
開ける地に屹立する  
わたくしの 装い

# 清水一美



## 清水一美

しみず ひとみ

1960年青森県八戸市生  
高校時代ジョン・キーツを知る。大学進学により上京。英文科4年時、堀辰雄を知り、卒業後日本文学科へ編入学。財団嘱託を経て、フリーの校正者に。森敦「月山」に惹かれ、37歳の12月越冬すべく、アルバイトとして八ヶ岳の山小屋に入る。その間、「万葉集」を集中読破。下山後、現職に。一方でおよそ15年放棄していた詩作に取り組むべく、それまで敬遠していた日本現代詩を読み漁る。

## ●受賞の言葉

朝日新聞天声人語が、詩人山崎佳代子氏の講演から、「声は人の魂を結びつける。声を出す時はみんなに届くように出し、声を聴く時は心を込めて聴く。この二つが欠けると社会はほころびる」と引く。声、すなわち言葉は昨今消耗品に貶められ、人は消費される言葉に溺れているようだ。消費し、される己に。水は人の手の内にあるとき、人を益する。だが、一度水が人の手にあまれば、人は沈黙するだけ。沈黙に学ぶ、発する力と聴く力。それは、言葉がわたくしに回帰するとき、自ずと身に付くものようだ。それは一本の立木のすがたにも似て、天に向けて屹立する。言葉は人に、人は言葉に。今回の受賞を、さらなる戒めとも、また今後の励みともしたい

# 庭は墓なのかもしれない

私がどんな気分でいればいいかまで  
父さんは知っているらしい

その言葉がとても卑猥な言葉に聞こえるのは  
私がいい音楽を聞いていないからだろうか  
どんな気分でいればいいですか

あるいは気が済みますかと

私は散歩をしながら自分に問う事ができる

父は私の血の中にいる

妹のそばに立ち

母の隣にねて

私はそれを窓に例えることができる

室内からみえる明るさの違う外の景色

私ら家族は昔飼っていた犬を庭に埋めたから

庭は墓なのかもしれない

庭ははかなのかもしれないと私の言葉をまねして

## 熊野級子



熊野級子

ゆや しなこ

1990年大分県生まれ  
高校、専門学校でデザインを学び、現在  
エディトリアルデザイナーの見習いとして勤務中  
仕事の合間に時間を見つけては小説や詩  
を書いている

妹が私の背後でくすりとわらう  
あの唇で

妹がいなくなつて父がいいと言つたので

妹のベッドで私はねむる

夜中に私は何かを期待して

あるいは 待っている

毛布の端で誰かが足踏みをしているような気がする

私は怖い

私は妹を待っている

そういえば妹の首はひどく美しい

その愛おしい思い出が 私を失望させる

足踏みは膝の脈打つ音だった……

### ●受賞の言葉

この度は優秀賞をいただき本当にありがとうございます  
ます。この受賞を機に自分に新しい可能性を感じると  
もうれしく思っております。

家族は思い合っているがために不幸なところがあり  
ます。誰もが自分の中に自分の家族に対する特別なコ  
ンプレックスをもっています。

また、不幸な人々たちを見ると、私はその人の中  
に愚かさを感じますが、その愚かさを私は愛していま  
す。これらのものが私の制作の核になってくるのでは  
と思っておりますが、今度はもっと明るいものを書きた  
いと思っております。



# 不帰郷

# 山下洪文

旅人ではなく回帰者ではなくおれたちは——黒田喜夫

僕の肩に埋められた  
君の寝顔が おだやかなのは  
その臉の裏に 故郷がひろがっているからか  
だとすれば 僕は  
果てのない夢の 草原に鉄橋を架け  
装甲列車一四六九号を 走らせてやりたい  
この白い椅子のうえに 君の心は風ざわたり  
僕の心は火砲のように動乱する  
君が かつて言ったように  
僕の瞳が  
暗い少女や 街路樹や あらゆる都市を宿す  
そのどんなきも 優しさを帯びるのは  
瞳孔のもっとも黒いところで  
故郷と名のつくところを 焼き尽くしてしまったからにはかならない  
だから僕は  
彼らを彼らとして愛する

君は  
君の優しさを 何処か違うところに担保したまま  
うわべだけの言葉で彼らを慰撫する  
帰郷者と不帰郷者は  
そのはじまりの一步から決別しているのだ  
ふたりの瞳孔に  
おなじ風景が宿ることは 決してない  
ふたりの心に  
おなじ優しさが宿ることは 決してない  
だから  
やがて 公園を去り  
橋の欄干にもたれて  
君は 川の流れていくその先を  
僕は 泥水に宿された  
数々の憎悪を  
どちらも濁された瞳をして 思うとき  
郷里へと向かおうとする  
赤い葉や 黄色い葉や 君の言葉と一緒に  
君の生首も  
いつか はらはらと舞い落ちればいい



山下洪文  
やました こうぶん  
1988年岩手県生まれ  
学生

### ●受賞の言葉

かつて高橋和巳は、「もはや激しい不幸や絶望すら起り  
そうにない」という時代認識を示しましたが、この精神の  
孤絶のかたちは、ますますその徹底性を深めると言え  
ます。

《現在》の底を流れる、暗い水脈のなかへと、自己の精神  
を浸し、犯すことよってしか、「重い虚妄の武器（黒田  
喜夫）」としての詩精神は、二度と掘り出しえないのでは  
ないか——というのが、私の確信です。

さて、賞をいただいた詩の一篇「不帰郷」は、黒田喜夫  
の最後の詩集から、タイトルを拝借しています。表層の部  
分がすべてそぎ落とされ、ただ《詩》だけがあるとした言  
いようのない彼の晩年の詩業に、あまりにも遠い三十数行  
ではありますが、ひとつの孤独と、言葉の底に秘められた  
暴力性とを絡みあわせようとする、ささやかな試みです。

これらのちいさな断片が、言葉の水平化に対する、精神  
の抵抗の流れへと、いつか漂着することを祈ります。